

またまた大盛り! 秋冬ファッション特大号。

ライトニング

# Lightning

2007 Vol.163 11月号 定価 ¥630

稲妻  
フェスティバル  
2007  
オフィシャル  
ガイドブック  
付き!!

巻頭特集

この秋の  
買いは  
天然素材に  
決めた。

デニム、ウール、レザー……

ホントに欲しい服は  
ここにある。

決定版!  
秋冬定番服、スウェット大全。

アメリカ、  
デニムの聖地、



HERE!  
greensboro  
NORTH CAROLINA

# 旧コーンミルズ社 に潜入!!

↓社名がコーンデニムに変  
わっても原点を忘れないよ  
うに旧コーンミルズの名前  
を残すグリーンズボローの  
ホワイトオーク・プラント

©Cone Denim, a division of  
International Textile Group, Inc.



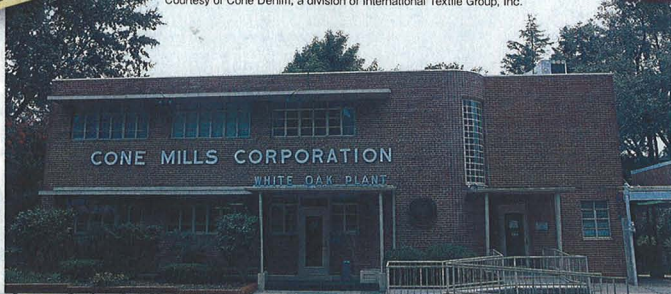
観光でもあまり行かないアメリカはノースカロライナ州。  
じつはここにこそデニムの聖地が存在する。  
100年以上前からデニムを生産してきたビッグネームである  
旧コーンミルズ社(現コーンデニム社)のプラントが存在するのだ。  
そんなデニムの歴史を担った大御所を表敬訪問。

text/S.Koike 小池彰吾  
photo&editorial coordination/Automan オートマン  
special thanks/Jameric Japan TEL03-5414-3003  
Courtesy of Cone Denim, a division of International Textile Group, Inc.



↑'36年に登場した  
オリジナルブランド  
であるコーンデー  
ブトーン・デニムの当  
時の広告。ブランド  
も展開していた

↑創業5年目である  
1909年の機械織り工  
場の様子。誰か農ま  
で機が並んでいる  
様子は社親、デニム  
の底力を再確認

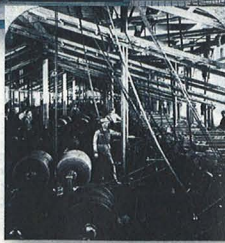


←102年前から付く  
ホワイトオーク・プ  
ラント。アメリカの  
デニムカルチャーの  
ほとんどはここら  
生まれたのだ

↑まだこの世にセル  
ビッジデニムしか存  
在しなかったころの  
極品作業風景。29  
インチ幅のデニムロ  
ールがゴロゴロある



©Cone Denim, a division of  
International Textile Group, Inc.



©Cone Denim, a division of International Textile Group, Inc.



©Cone Denim, a division of International Textile Group, Inc.

↑当時のロープ染色の様子。ヴァンテージ独特の色落ちはこちらな  
アナログ作業の成せるワザだった。それにしても大規模である

# The Standard Garments



●現在も稼働する旧式のシャトル織機。彼らがナローデニムと呼ぶセルビッジデニムはこのマシンからだけが作ることができない



工場のオリジナルTシャツもあるよ。

'59年から働いているのよ。



# あの頃の旧式シャトル織機は今も動いている。

←歴史あるプラントだけに本物のワークスタイルをスタッフに見せることができる。なんと左の写真のおばちゃんは50年代から働いているという超ベテラン。今でも現役である



©Cone Denim, a division of International Textile Group, Inc.

↑工場ではただデニムを織るだけでなく、換み取った棉花から糸を撚り、染色し、デニム生地を織るところまですべてを行う

100年前から変わらずデニムを織り続けているコングデニム。1922年からいるリーバイスにデニム生地を100パーセント独占供給していたほどのメジャーブランド。つまり今日のヴィンテージデニムのほとんどがここで織られたものだったってわけだ。その織られたものでも歴史が古い、ノースカロライナ州グリーンズボロにあるホワイトオーク・プラントは超巨大。現在でも24時間3交代制で休むことなくデニムを生産し続けている。そんなウィービングルーム(筒織り工場)にボツと存在する古臭いエリア。なんとそこでは旧型の力織機によるセルビッジデニムが生産されているのだ。アメリカでは幅広い革新機械の導入によって80年代に姿を消したヴィンテージ織機が再び動き出し、当時のデニムを生産しているのだ。機械自体も半世紀前のモデル。1925年には3000台あったという旧式のシャトル織機もいまは32台と減少しただけで、確実にその生産量を伸ばしている。コーン製セルビッジデニムファームといえば、ヴィンテージデニムファームにしめみれば「ふんふん」となるキード。もちろんそれは日本の岡山全体の規模と比べれば小さいかもしれないけれど、アメリカのデニムはまだ死んじやない。アメリカの本場アメリカの伝統が始まるかもね。



## The Standard Garments



ホワイトオーク・プラントの奥に関係者だけが  
入ることができる秘密の小部屋。そここそア  
メリカのデニムの歴史をこの目で見ることで  
きるアーカイブルームだ。そこにはまさに偉大  
なるデニム大国アメリカの遺産が眠っている。



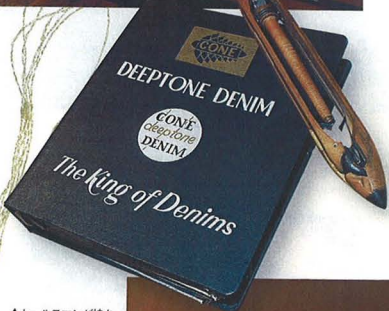
↑ 古着ワークウェアの  
王道でもあるビッグス  
ミスのポスター。コー  
ンデニムのロゴも入っ  
たバージョンが存在し  
たのねと勉強する



↑ ウィンテージ好きには衝撃が走  
る。1905年のファーストロッ  
トというデニム生地。もちろん生  
のままである。セルビッジは白だ

↑ 1900年代からの法的な文書や  
特許の書類などもすべて現存。創  
業者の軌跡もひも解くことがで  
きるほどのたくさんの資料もある

## アーカイブルームには デニムの歴史がある。



↑ セールスマンが持ち  
歩いてきたデニムの生  
地見本帳と旧型力織機  
を走る木製のシャトル  
もしっかりとアーカイ  
ブルームに保管する

→ 旧コーンミルズのオ  
リジナルデニムブラン  
ドであるディープト  
ーン・デニムのタグ見本  
もストック。なかなか  
お目にかかれない逸品



1900年代の  
生地見本!

The Standard  
Garments

# そこは ヴィンテージデニムの宝庫だ。

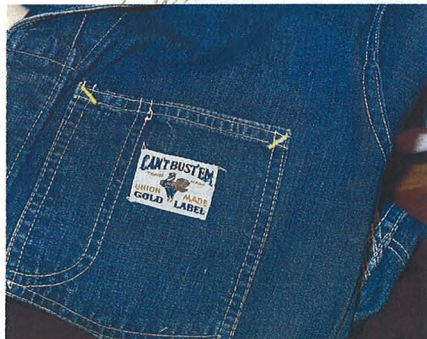
アーカイブルームにストックされるのは布や紙の資料だけではない。ここで織られた生地を使った製品もかなりの数を資料としてストックしているのだ。しかもあるのは無名に近い今はなきデニムブランドばかり。'30~'50年代のツウ好きなデニムたちに光を当てる。

## '50s Cone Fabric

'50年代のコーンミルズの生地見本。セルビッジデニムとひとくちにも言っても、オンスの違いや様々なカラーのミミが存在したことがわかる貴重な資料である。当然デッドストック



まさに  
ヴィンテージ  
博物館。



## '50s CAN'T BUST'EM

1946年にリーに買収されながらもブランドネームは生き残ったキャントバスタームのカパーオール。ブランドキャラクターはオーバーオールを着た賢。これがまたイイ味出してる



## '40s Stonewall

防縮加工されたコーンディープトーンデニムが使われたストーン・ウォールのオーバーオール。ただしストラップは欠品してる



## '30s Big Favorite

ウールブランケット、チンストラップ、それにコーデュロイの切り返しなど気になるディテール満載のビッグ・フェイバリットのカパーオール。ボタンが欠品してるのが残念



## コーンデニムで知った ヴィンテージ デニムのあれこれ。

これまでヴィンテージデニムについては、もともとが大量生産のワークウエアだったということもあって、確かな情報がないかつかめなかった事実が多い。でもコーンデニムで聞くことによって、いろんな事実を教えてください。ただしどれもコーンデニムの見解なのであしからず。

### ●旧コーンミルズ社製デニムがリーバイスのジーンズで採用されたのは？

それまでアモスケイヴ社のデニムが供給されていたリーバイスのデニムに旧コーンミルズ社が参入したのは1915年のこと。そこから1921年までは両社によるデニム供給がされていた。

### ●旧コーンミルズ社製デニムがリーバイスで100%のシェアになったのは？

旧コーンミルズ社製デニムがリーバイスの製品で独占的シェアを獲得したのは1922年のこと。様々な資料により各説あったが、コーンデニムの資料では1922年ということになっている。

### ●セルビッジとは、またセルビッジが赤ミミになったのは？

セルビッジ (Selvage) の語源はセルフ・エッジ (Self-Edge) から来ている。これは14世紀から存在するディエールで、いわゆる旧式の力織機で織ったデニムにできる両端部分。コーンデニムの場合、1926年までの生地は白ミミだったが1927年製造のデニムからリーバイスでは赤ミミ仕様になったという。

### ●年代による色落ちの違いについて。

常にヴィンテージほど色落ち (いわゆるタテ落ち) は優れていると言われているが、これは糸の染色方法やインディゴの性質、それに紡績技術によるところが大きい。コーンデニムでもっともデニムの色落ちに影響したのは'75年に、それまで綿糸を撚る工程がマグネットを利用したものが機械式に変わったことらしい。マグネットの磁力を使って糸を撚る方法では撚りにもムラができていたものが、機械式になることで均一化。これによって独特の凹凸感のある糸は存在しなくなったという。ということはリーバイス501で言えばスマールエタブの付く66後期モデルの時代に生地質感やデニムの色落ちに大きな変革が訪れたことになる。

### ●トップボタン裏の刻印の秘密。

リーバイスジーンズのトップボタン裏にある刻印はやはり製造工場を表すもの。6がテキサス州エルバソ工場、8mがデナソー州イクスビル工場を表しているらしい。現在北米にあるリーバイスの工場はすべて閉鎖されている。

### ●リーバイスにけるセルビッジデニムの廃止は？

旧式のシャトル織機によってできるデニムならではのセルビッジは1985年までリーバイスで採用されていたとともに、この年が旧コーンミルズによる生地独占供給の最終年。現在もデニムの供給はしているが、リーバイスが生産拠点を世界各国に設立したことで、アメリカ生産の生地が独占的に使われることはなくなった。



## '40s Calf Skin

コーン・ディープトーン・デニムを使用したカーフ・スキン製オーバーオール。なぜデニムなのにブランド名が「字年のなめし革」？ タグにはコーンのネームも入る



## '40s Big Winston Overalls

当時の持ち主がウエストオーバーオールに改造したのか、サスペンダーボタンは手縫いだし、リベアもかなり厚。残念ながらオリジナルがどういうオーバーオールだったかはまったく不明。でもデニム自体は'40年代モノ



## '50s Red Ram

防縮加工のシャンブレ生地を使ったワークシャツ。オーバーオールをこれに合わせていることが開口の色落ちで判断可能。当時の労働着が全身デニムであったことの実証を語る

